

第2章

事前活動

第63回日米学生会議事前活動

1. 第62回報告会、第63回説明会

<第1回>

日時：2010年11月27日(土)12:00～16:00

場所：慶應義塾大学

概要：

第62回日米学生会議報告会、第63回日米学生会議説明会に先立ち、前総務大臣 片山善博氏から基調講演として、日本の学生に向けてのメッセージと共に日米学生会議に対する激励の言葉をいただいた。その後、第62回日米学生会議参加者により昨年度開催された会議の各開催地での経験、分科会での議論等について報告が行われた。その後、第63回日米学生会議参加希望学生向けに、日米学生会議参加者によるパネルディスカッションや本年度実行委員による発表を行い、日米学生会議の魅力を広く一般にアピールした。

<第2回>

日時：2010年12月18日(土)13:00～16:00

場所：早稲田大学

概要：

慶應義塾大学で行った第1回の第62回日米学生会議報告会と第63回説明会を、早稲田大学でも開催した。基調講演はなかったが、日米学生会議の魅力を伝える新たな試みとして「数字で見るJASC」という会場参加型の発表を行い、好評を博した。また、来場者との交流時間には、実行委員のみならず、過去の参加者と来場者の方々が活発に会話を交わした。



2. 第63回日米学生会議選考会

日時：第一次募集(1月15日～2月28日)

第二次京都選考会(3月12日～13日)

第二次東京選考会(3月20日～23日)

場所：同志社大学(今出川キャンパス)、
日米会話学院

概要：

1月15日よりWebページでの一次小論文の受付を開始し、一次小論文の結果、2次面接に進んだ応募学生に対し、グループディスカッション、個人面接、教養試験を課した。

3. 春合宿

日時：2011年5月1日～5月3日

場所：代々木オリンピックセンター

概要：

4月の選考委員会により最終決定した28名の参加者と8名の実行委員が、春合宿にて初めて顔をあわせた。本合宿において参加者は日米学生会議の歴史を学び、外国人留学生との討論、分科会活動などの「日米学生会議の基礎」を学び、8月の本会議に向けての最初の一步を踏み出す機会となった。

【分科会活動】

第4章各分科会の活動の春合宿の活動を参照。

【ようこそ先輩】

76年の歴史を築き上げてきた先輩方を囲み、日米学生会議の歴史を知るための交流会を開催した。第8回参加者の先輩から直近の第62回参加者まで、あらゆる世代のOBOGとの対話を通じて、本年度参加者たちの8月の本会議に向けたモチベーションアップの向上を図った。

<参加者の声>

レセプションでは、初めて日米学生会議のOBの方々とお話しすることが出来た。幅広い年齢の方がいらっしや、日米学生会議の伝統や歴史を肌で感じた。またOBの方々のお仕事やご活動は内容、場所共に驚くほど幅広く、大学の枠を越えた日米学生会議でしか聞くことのできない、たくさんの刺激のお話を聞くことができた貴重な機会であった。また、ほとんどの方が「日米学生会議の良い所は一カ月の会議で通し本気の想いをぶつけ合えるかけがえのない仲間ができることだ」とおっしゃっていたこと、「日米学生会議には全力でぶつかってみなさい」とおっしゃっていたことが印象的であった。私も本会議を含め、精一杯日米学生会議にぶつかり挑戦していきたい、と強く思った。(伊藤 実梨)

【沖縄勉強会】

講師：山口寛明氏

概要：

第62回会議の参加者であった山口氏にお越しいただき、沖縄米軍基地移設問題について学んだ。前半は山口氏による沖縄米軍基地問題と日米安全保障に関するレクチャーがあり、後半はそれらを踏まえた上で沖縄米軍基地の是非についてディベートを行った。参加者に多くの学びや気付きを与えた有意義な機会だった。

<参加者の声>

沖縄勉強会はとても密度の濃い2時間であり、特に昨年の参加者によるレクチャーは非常に分かりやすくまとまっていて、沖縄問題をはじめ、日米安全保障問題などの全体像を掴むことができた。

ディベートでは自分の意見に関わらず、賛成派と反対派に分かれたので、異なる観点から意見を交わすこともできた。自分のグループには沖縄出身の学生もおり、実際の騒音の被害や現地の人の声を議論に反映してくれたため、非常に参考になった。そこで感じたのは、やはり現地を実際に

訪れ、現地の人々の声をもっと聞きたいということである。本会議では沖縄を訪れるので、米国基地問題などに対して現地の人と関わり議論していきたいと強く感じた。(館林 真一)

【English Debate Workshop】

講師：綾部功 先生

概要：

英語ディベート界の第一人者である綾部先生をお招きし、ディベートの意義とルールを学んだ。論理的かつ効果的に意見を述べる方法を学んだ後に、与えられた議題について実際に討論する練習をした。

<参加者の声>

綾部先生の説明はとても分かりやすく、ディベートをやったことのない私でも無理なく練習できた。ワークショップの最後に行った3人グループでのディベートの実践練習は、特に役に立った。直前の先生の講義の中で取り扱った"Smoking should be banned"という論題の構成を参考にし、新しい論題について signpost、explanation、support を考え、ディベートをしたが、その時に気づいたことが1つある。それは、ディベートの思考法は論理的に分かりやすく意見を述べる時に常に必要な技術だということだ。ディベートをする時に限らず、自分の考えを論理的に相手に伝える時に、このワークショップで得たことは大変役に立つと感じた。もっと練習して、本会議で議論する際にも参考にしたいと思う。(櫻井 千浪)

【English Discussion Session】

本会議中の議論は基本的に英語で行われる。本プログラムは分科会トピック以外の内容について英語で自由に議論をすることで、英語に慣れることと英語を使った表現のために開催した。

<参加者の声>

English Discussion Session では、まず始めに英語で自分について語るワークショップを行っ

第2章 事前活動

た。自分についての事柄でも短時間で英語で伝えきることの難しさを実感したが、日本側参加者同士笑いながら和気あいあいと楽しむことができた。

次に、英語での初のスペシャルピックが行われた。私のグループは「テクノロジーの発展」について議論した。ここで、私が学んだことは2つある。1つめに、本当に伝える意志があれば英語は問題にならないということ。2つめに、助け合いがあってこそ良い議論ができるということである。私のグループでは原発の是非について意見が対立したが、だからこそ熱い議論ができた。そこで感じたことは、議論が白熱する時は自分の英語の上手い下手に関わらず、ただ伝えることに必死になれるということだった。そして、分からない単語があれば周りが助けてくれたからこそ気後れすることなく議論ができた。本会議でも助け合いながら熱く議論したいと感じた。(小池 あずさ)

【春合宿を終えて、本会議への意気込み】

35人の熱い仲間と出会い、個々のモチベーションの高さに刺激を受けた。72分の1として日米学生会議にどう貢献していくことができるかを常に追求し、これからの一瞬一瞬を本気で取り組んでいきたい。(阿部 彩織)

自分が日米学生会議にいる意義を常に考えながら関わっていききたい。自分にしかできないことを見極め、最高のパフォーマンスを発揮したい。自分が日米学生会議という歯車の1つであることを認識し、会議を盛り上げていきたい。(川邊 拓也)

英語—最初ダメだったのに、すげえのびたね。と言わせる。RT—グローバル化すげえな。どうやって話し合ったの!?と言わせる。JASC—63回はヤバイ。と言わせる。そして、自分が納得できる夏にする!!(小林 歩)

素晴らしい個性の溢れる日米学生会議に参加する事ができ、改めて喜びを感じている。今後、メンバーひとり一人の成長が会議を一層意義深いものにすると思うので、本会議までの3ヶ月間、しっかりと事前準備を行いたい。

(棚田 壮太)

盛り沢山な内容であったという間だったが、これが「始まりだ」という事を忘れず、本会議までの時間を大切に過ごしたい。同時に、素晴らしい仲間感謝し、切磋琢磨して自分もしっかりと光る存在でありたいと思う。(山下 祐里奈)

4. 事前広島研修

日程:2011年5月28日(土)～5月29日(日)
場所:平和記念資料館、平和記念公園、
国立広島原爆死没者追悼平和祈念館、原爆ドーム、
中国新聞ビル、レイノイン

概要:

本会議前に参加者有志が広島を訪れ、核兵器や戦争、平和について学ぶことを目的とした事前研修を行った。

1日目は昼に広島に到着した後、広島平和記念資料館を見学し、広島女学院の高校生と広島市立大学の学生による案内のもと、平和記念公園をグループで見学した。その後、被爆体験証言者かつ非核特使 梶本淑子氏の戦争体験談を全員でお聞きした。見学の後、日米学生会議参加者は互いの感想や問題意識を共有し、翌日の議論に備えた。2日目は広島市立大学水本和美教授とUNITAR国連訓練調査研究所広島事務所長 アレックス・メヒア氏にご講演いただいた。その後、参加者は広島学院生徒と広島市立大学学生13人を交えて、グループに分かれて議論を行った。

参加者は見学や講演によりヒロシマについて理解を深め、地元学生を交えた議論を通じて平和という言葉の意味を問い直すことができた。今回の研修では、日米関係を考える上で欠かすことので

きない視点を得ることができた。

<参加者の声>

私は今回の広島合宿で大きく分けて2つのポイントを学んだ。

一つ目は核廃絶と平和を混同しないことである。核廃絶は平和な国家間関係を実現してからはじめて達成できるものである。唯一の核使用国である米国と唯一の被爆国である日本の同盟関係により東アジアの安全保障は保たれてきたが、それは北朝鮮の核保有や中国の衛星破壊実験などにより大きく揺らいでいる。現在の国際社会で、他国とは戦争にならないという完全な保障がない限り、この世界が核兵器を放棄することは不可能であるようにすら思える。短絡的な反核も説得力を持ちえない。

二つ目は核保有者、投下者の姿の追求である。加害者の具体的なイメージなしに被害の悲惨さだけを訴えるのでは、その悲劇が起こった原因を追究することができず、被害の印象は加害者不在の天災に近いものになってしまう。核について議論する際に、その被害の大きさのみならず開発段階の危険性や考える日本への脅威を意識しなければならぬと感じた。(中川 渉)



被爆体験証言者 梶本淑子氏を囲んで



原爆死没者慰霊碑を前に黙祷する参加者

5. 防衛大学校研修

日程：2011年6月24日(金)

場所：防衛大学校(横須賀)

概要：

日米学生会議では毎年、日米関係を考えるにあたり重要な「安全保障」に関する知識を深めるため、防衛大学校を訪問し、教授より特別講義を受けると同時に、同世代である防衛大学校生との対話の機会を設けている。本年度は、武田大介教官と齋藤康裕2佐による特別講義に加え、防衛大学校施設見学が行われ、その後防衛大学校学生と日米学生会議参加者が共にグループに分かれて議論を行った。

<参加者の声>

防衛大学校研修では、校内を見学し、講義を聴講した後、防衛大学生と議論する時間をとった。訪問前は防衛大学校に関してあまり知らなかったが、実際に訪れてみて起床から就寝まで一日の生活がすべて決まっている厳しい大学生活であると知ることができた。毎日の授業も防衛学など特殊な教科が多く、座学のみならず遠泳や100km歩行、銃撃などの訓練もある。しかし、私の話した学生が一番強調していたのは学生同士の思いやりの強さであった。卒業後すぐに上官となり30～

第2章 事前活動

50人の部下をもつ彼らは、「どうしたら人に信頼され、良き上官となれるか」を強く意識している。ある学生の「心から相手のことを思いやらなければ、部下はついてこない」という言葉が印象的であった。先輩後輩間、同学年の間での思いやりの強さは、防衛大学校の1つの校風であるようだ。時に死と隣り合わせになる軍事組織では、規則と罰則によって部下を統率するイメージが強かったが、人に信頼され立ち向かうにはどんな場合でも思いやりが重要なのだと考えた。それは、私が専門とする医療でも同じである。医師は患者の死に立ち向かうことがある。そのような中、信頼関係を築くには、軍事組織で規則ではなく思いやりを重要視したように、医師も医学の力だけでなく思いやりが重要なのだと思った。(石川 陽平)



防衛大学校生とのディスカッションの様子

6. 東日本大震災・原子力発電勉強会

日程：2011年6月25日(土)

場所：貸教室・貸会議室 内海(水道橋)

概要：

第63回日米学生会議では、参加者全員で、東日本大震災の被害とそれからの復興を考えることを目標に掲げていた。それに先立ち、東日本大震災・原子力発電勉強会を開催し、担当学生が東日本大震災の被害、また原子力発電の現状について発表を行うことで、現在の問題を共有し、自分た

ちに何ができるかを考えた。さらに、被災地で活動されている日米学生会議OBで医師の高野恭平氏、宮城県石巻市を中心にボランティア派遣を行うLast One Mile Projectの鈴木悠平氏をお招きし、話をうかがった。最後に、学生がどのように復興支援に携わることができるのか、グループに分かれて話し合った。本会議ではこの勉強会で得た知識を用いて、アメリカ側参加者に大震災がもたらしている影響について説明し、震災からの復興や今後のエネルギー問題について共に考えることができた。

7. 第63回日米学生会議 直前合宿

日時：2011年7月27日(水)～7月28日(木)

場所：NSG 学生総合プラザ STEP

概要：

直前合宿では、1ヵ月の本会議中のスケジュールやルールの確認、分科会活動、本会議中のプログラムの準備を行った。分科会活動では各分科会内で日本での事前活動のまとめや本会議中の目標の再確認をし、その後、他の分科会と進捗状況を共有した。また、本年度の4つの開催地についての情報を共有し、本会議中の各プログラムに対する事前知識を身につけた。さらにウェルカムパーティーやスキットなど、本会議中のプログラムの最終準備を行った。第63回日米学生会議本会議を迎えるにあたり、参加者としての責任を再確認し、本会議に備えることができた。

